
僕は星奈が一番可愛いと思う

スノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は星奈が一番可愛いと思う

【Nコード】

N6264X

【作者名】

スノー

【あらすじ】

小鷹と星奈がただイチャイチャするだけのお話です。リア充爆発しろ！by夜空

正確には羽瀬川小鷹くんの視点に立って柏崎星奈さんがデレデレになっっていく過程をあたたかく見守っていくSSです。

原作3巻がストーリーの起点になります。気楽に楽しんでいただけたら幸いです。

大幅な改稿をしました（11/19） これで少しは読みやすくなっ…た？

とある冬の日

柏崎星奈。

聖クロニカ学園の理事長の一人娘で、容姿端麗・成績優秀・スポーツ万能という、あらゆる点においてパーフェクトな美少女。ただし性格だけは非常に残念で、高慢で傲岸不遜でクラスの男子を下僕と見なしていたりする。

そんなヤツが今、目をウルウルさせて

「ぎゅーってして」

なんてセリフを甘えた声で言ってきたら…どうする？

「はい？」

「だから、ぎゅーってして！」

…状況を説明しよう。

今日は日曜日、クリスマスまであと1週間。

俺と星奈は駅前で待ち合わせをしていて、ついさっき俺が来たところだ。

なるほど、理解した。

寒い中ずっと待ってて冷えたから抱きしめてあったためしてほしい、という事らしい。
ふむ。

……。

周りにすげー人いるんですけど！

これは難易度高えな…と思って躊躇していると、

「小鷹のいじわる…」

目に涙をためて星奈は俺をにらみつけてきた。

反則だろそれ…。

しょーがない、待たせたのは俺が悪いしな。とりあえずぎゅっとしてみる。

「ほれ」

「えへへ…ありがと、小鷹」

ついでに頭もなでてやる。サラサラの金髪で、さわっていて気持ちいい。

…胸が当たるのはいつもドキドキするけど。

それにしても、半年でここまで変わるとは…。

半年前↓踏んであげるから蹴きなさい。それとも靴舐める？

現在↓ぎゅーってしてくれないと、やだ！

…どうしてこうなった？

どうしてこうなった！

おそらくこの謎を解くには、夏休みまでさかのぼる必要がある。

そつ、あれは星奈が俺と同じケータイを買ってきて、俺とメールの

やりとりを始めた頃の話…。

メール？（と、ぼっちゃり系についての話）

夏休み。とある昼下がり。

小鳩と昼飯を食った後、俺は自室でライトノベルを読んでいた。

ピロリロリン♪

メールの着信音。星奈からだった。

メルアドを交換して以来、毎日星奈とメールを交わしている。

『晩ご飯何だったの？』という他愛の無いものから、『小鳩ちゃん
ペロペロクンカクンカ』といった変態的なものまでバリエーション
に富んだメールを送ってくる星奈。

今日はどんなメールだろうか、早速開けてみる。

FROM 星奈

TITLE ヒマ

部屋にだれもいない。（T・T）。

知らんがな。そのまま返信。

FROM 小鷹

TITLE RE

しらんがな（´・ω・｀）

FROM 星奈

TITLE RE2

こだかきてよ

どーせヒマなんですよ？

どーせとか失礼なヤツだなオイ！まあ当たってるけどさ…。

FROM 小鷹

TITLE RE3

でも、外暑いしなー

FROM 星奈

TITLE RE4

(´・ω・、) ショボーン

(´・ω・、) ショボーン

(´・ω・、) ショボーン

分裂しやがった…。

スルーするのもアレだし…仕方ないな。

リビングでアニメに興じる我が妹に出かけることを伝えて、俺は学園へ向かう。

夏休みの昼間ということもあって、電車やバスはガラ空きだった。バスを降りて、うだるような暑さにうんざりしながら歩いていく。

部室のドアを開けると、クーラーのひんやりとした風が流れてきた。生き返るぜ…。

星奈はソファに座って携帯ゲームをやっている。俺に気付くと、

「あ

「ようっ

「小鷹なら来てくれると思ったわ！…えへっ」

上機嫌に笑う星奈。不覚にも少しドキッとしてしまった。
俺は目をそらしつつ、

「しっかし幸村もいないとは珍しいな…あいつ夏休みの初日なんて朝の8時に来てたぞ」

「いろいろ忙しいんでしょ。それよりさ、ゲームしない？家からたくさん持ってきたのよ」

「どんなゲーム？」

「ギャルゲとかエロゲとか…」

「もうちょっと普通のやつはないんですかね……」

「贅沢なヤンキーね。じゃあこれは？」

星奈が差し出してきたのは、聖剣のブラックスター（以前部活で騒動を巻き起こしたゲーム）の格闘ゲームだった。

格ゲー化もされているとは…やっぱり人気のあるゲームなのかもしれない。18禁だけど。

そしてしばらく星奈と格ゲーをプレイしていると、

「ね、ねえ小鷹」

「あ？」

「小鷹はさあ…ぼっちゃりした女の子って、ど、どう思っ？」

唐突に、何だかよくわからないことをきいてきた。

「どう思っつて…ぽっちゃり系っていうと、マシコ・デラックスみたいな感じか？あれはさすがに…」

「なんでそんな極端なヤツの話になるのよ！？そうじゃなくて！こ
う…アメガミの利穂子みたいな…」

残念ながらそのアメガミ（たぶんギャルゲだろう）をプレイしたこ
とがない俺。

さっぱりイメージが浮かばない。

「よくわかんねーけど…俺はあんまり好きじゃないかな。かといっ
てやせ気味なのもどうかと思うけど」

「そ、そっか…」

心なしか肩を落としているように見える星奈。

「ぽっちゃりはダメなんだ…」ボソ

「え？なんだよ」

小声で何やら呟いている。もしやこいつ…。

「……………もしかしてお前、体重g」

ピン！

「いてえ！鼻にデコピンすんな！」

「ななな何意味わかんないこと言ってるのよ！このスタイル抜群のあたしがなんで体重なんて気にしなくちゃいけないワケ！？」

じゃあどうして動揺しまくってるんですかね…。

俺は星奈にジト目を向ける。

「……………ふん！」

ご機嫌ナメな感じでぶいっと顔を背ける星奈。

「えーと…………別に気にしなくてもいいんじゃないか？」

「気にするわよ！」

するのかよ！俺は心の中で盛大にツッコみつつ、

「どれくらい増えたんだよ？」

「あんたよくそんなストレートに聞けるわね…」

星奈は呆れた眼差しで俺を眺めた後、顔を赤くしてうつむきながら、

「い、いちきろ…」

とかろうじて聞き取れるレベルの小声で言った。

「…………誤差の範囲内じゃねえか」

「んなわけないでしょ！神であるあたしにとってこれは大問題よ！」

たかが1キロ増えただけなのに…。女子の感性はわからん…。

「このままだと絶対夜空に『ははは本当にお前はまるまると太った醜い豚だな！豚肉となってカラツと揚げられるがいい』ってバカにされるに決まってるわ！そんなの耐えられない！」

「黙ってれば誰も気付かないだろ…普通に考えて」

「それに…あんたも太った子は死ねみたいに思ってる感じだし」

「いやそんな全否定はしてねえぞ!？」

さりげなく捏造する星奈。つかなんで俺の発言をそこまで気にするんだ？

「と・に・か・く！あたしは完璧なプロポーションを常に維持しないとイケないのよ!」

「はあ」

「何か即効性のあるダイエットとかないかしら？」

「即効性って…とりあえず適度に運動するのが一番いいんじゃないか」

「運動ってどんな？」

「毎朝ジョギングするとか」

「…あたし最近朝早く起きるのつらいんだけど」

「お前は疲れたサラリーマンかよ…。どうせ夜遅くまでゲームやってんだろ」

「よくわかったわね！」

なぜそこで得意顔になる。

「んーほかに何かないかしら…。あ、そーだ！ねーねー水泳はどう？」

「あー。悪くないんじゃない？運動量多そうだし」

猛暑が続く中、最適のダイエット方法と言えるかもしれない。

「おっけー！じゃあ明日竜宮ランドに集合ね！」

「おう。……………って、えっ？」

「なに変な顔してるのよ。あんたも来るのよ」

「……………なんで俺も？」

「この前みたいに訳のわからないチンピラがまた来たら困るじゃない。ひ、ひとりじゃちよつと心細いし……………」ボソ

最後の方が聞き取れなかったけど、要は俺もついていかないとダメらしい。

まあ、特に用事があるわけでもないしな…。

そういうわけで俺は星奈のダイエットプロジェクト(?)に付き合
うことになったのだった。

メール？（と、ぽっちゃり系についての話）（後書き）

というわけで次回はプール話になります。

お楽しみに（´、`）

プール・DE・ダイエット【前編】

そして次の日。

俺は星奈の水泳ダイエットプロジェクトに付き合つたため、竜宮ランドへ向かった。

11時前に星奈と合流する。

前に一度ここに来たことがあるが、今日はやけに人が多い。

「なんか8月いっぱい全部の施設が半額みたいね」

「あーどおりで…」

納得。そりゃ客も多いわけだ…。

目当てであるプールの入場チケットを購入する。

その後水着に着替えるため、俺は星奈と別れ男子更衣室へ入った。

小さな子供たちの怯えた視線を感じながらも（悲しい話だ）、俺は手早く着替えを済ませる。

廊下の壁に背を預けてしばらくぼーっとしていると、

「おまたせ、小鷹」

星奈に声をかけられた。

淡い水色の花柄ビキニ。あいかわらず抜群のスタイルで、思わず見惚れてしまう。

…ん？待てよ。

「全然ダイエットが必要な感じに見えないんだが……」

すらつとした脚、グラビアアイドルのようなメリハリのあるボディライン。いったいどこが不満なんだろうか。

「はぁ？見てわかんないの？」

わかりません。

「まったく…ほ、ほらお腹のあたり、とか……」

顔を少し赤らめて言う星奈。

「別に何も違和感ないけど」

「んなわけないでしょ！」

女の子のお腹を凝視するという行為に胸のざわめきを感じつつも、俺は観察する。

やはり腹が出てたり、だらしくぜい肉が垂れ下がってるようには見えない。

「わからん……」

「…じゃあ、確かめてみる？」

「へ？確かめるっておま」

すると星奈は強引に俺の手を取って自分のおなかをさわらせた。

「な!？」

突然の流れに驚く俺。おお…何かぷにぷにしてるぞ…。

「ど、どう…？」

「どうと言われましても……」

反応に困る。といふかなんで俺は女子の腹をさわっているんだろうか？

ドキドキしつつも、どう答えるべきか頭をフル回転させる。

……。

………。

俺はとりあえず…おなかの『肉』をつまんでみた。

むにゅっ。

「ひゃうー！」

「ああ、なるほど…」

見た目ではわからなかったけど、確かにこれは…ちょっとだらしないかもしれない。

ふにふに、ふにふに。

「な、なにすんのよおー！」

顔を真っ赤にして、涙目で俺をにらみつけてくる星奈。

いや、最初にさわらせたのお前じゃん…。

そんなアホなやりとりを終え、俺たちはシャワーを浴びていざプールへ。

「混んでるなあ…」

流れるプール、波のプールは人でごった返しており、水泳に適して
そうな25メートルプールも満員状態。

唯一50メートルプールだけレーンが一つ空いていた。

「ここ、使わせてもらうか」

「そうね」

準備運動をし、星奈が勢いよくプールに飛び込んで泳ぎ始める。

レーンが他に使えないため、俺はのんびりと星奈の泳ぎを眺めるこ
とにした。

…にしても上手いなこいつ。フォームもスピードも申し分ないレベ
ル。

この前俺とここに来た時は最初は完全なカナツチだったというのに
…。

星奈は俗に言う天才肌ってヤツなんだろうな…そんなことをぼん
やり考えた。

星奈がプールから上がって、今度は俺がレーンを使う。

何度か往復を繰り返し、俺たちは昼食を取ることにした。

「ちょっと待ってて！あたし今日お昼持ってきたの！」

そう言ってロッカーへ走っていく星奈。

実に豪快な揺れっぷりである……ナニとは言わないけど。

そして星奈はランチボックスを抱えて戻ってきた。

かわいらしいネコの絵が描かれたフタを開けると、中にはおいしそうなサンドイッチが詰まっていた。

「おお……すげえ……」

思わず驚嘆の声が漏れる。

星奈は、してやったりと言わんばかりの表情で、

「ふふん！ じつ？」

「……これお前が作ったのか？」

「もっ
ちろん！」

⌈
⋮
⌋

⌋
⋮
⌋

「……ホントに？」

「うん……」

⌋
⋮
⌋

「…………ごめんなさい」

しゅんとうなだれる星奈。ですよね…。

「な、なによその『ですよー』とでも言いたげな顔は！？あ、あたしが本気出したら中華料理だろうとフランス料理だろうと簡単に作れるんだからっ！！」

別にそこまで求めてねーけど…でも星奈は料理も一度教わったらあつという間に修得しそうな感じはする。

ヒマなとき俺が教えてやるのもいいかもしれない。

「じゃ、いただきますーす」

早速俺はツナサンドを口に放り込む…うまい。全然水っぽくないし、コシヨウも程よく効いている。

他のサンドイッチもまるでプロの料理人が作ったんじゃないかと思えるほどに美味しい。

…まあプロの人が作った可能性は高いけど。

なんだかんだで俺はあっさりと半分を平らげてしまった。

「うまかった…ってあれ、星奈？」

よく見ると星奈は1、2個口にただけで、さっきからほとんどサンドイッチに手をつけてない。

「お前食わないのか？」

「……ねー小鷹、今日何しに来たかわかってる？」

「えーっと…遊ぶため？」

「違うわよバカ！あたしのダイエットが目的でしょーが！」

素で忘れてた…。

「せっかく運動したのにここでたくさん食べたら意味ないじゃない」

「そうかなあ…」

「そうなの！」

俺はその筋の専門家でもないけど、しっかり食って、しっかり運動するのがベストなんじゃないのか？

俺が星奈の提唱する食事制限に疑問を呈していると、

ぐぎゅるるる…

空腹時の効果音が大音量で鳴り響いた。

「~~~~~！！」

顔を真っ赤にしてお腹を抑える星奈。

「……無理すんなよ」

俺は星奈にタマゴサンドを差し出す。

「……………うつ、もう……………あー！バカバカバーカ！！」

半泣き状態でサンドイッチにかぶりつく星奈。

結局、星奈は残りを全部一人で食べ切ったのだった。

プール・DE・ダイエット【前編】（後書き）

後編へ続きます！（・）（

プール・D E・ダイエット【後編】（前書き）

今日は肉（29）の日！深い意味はありません！
それではプール後編ですどうぞ。

プール・DE・ダイエット【後編】

昼食を済ませ、俺と星奈はプールサイドのベンチで休憩していた。プールでは大勢の学生グループがワイワイはしゃいでいる。

さすが夏休み。

楽しそうだなあ…と思いつつちらつと横を見てみると、金髪の美少女がよだれを垂らしながらこっくりこっくりと舟をこいでいた。

「……おい、星奈」

無反応。

「食べてすぐ寝ると、牛になるぞ」

「誰が牛みたいなの乳よ！」

どんな聞き間違いだ…お前は某海賊マンガの赤鼻の船長か。

「てゆうかあたし早く泳ぎたいんだけど。さっきいっぱい食べちゃったし」

「ある程度時間空けてからのほうがいいんじゃないか？すぐ泳ぐのは身体に良くないって聞くぞ」

俺としてはこういう場所でリバーは勘弁していただきたい。

とはいえずつとベンチでボケツとするのもアレなので、ひとまずウォーター 슬라이ダーに乗ることに。

タイミングが良かったのか待ち時間はほとんどなく、あっさりと順番がやってきた。

最初は俺から。

青いチューブの中を高速で滑っていく。思ったよりもスピードがあつて少しビビる。

そしてあつという間に出口へ…バシャン！

楽しめる時間は短いが、ウォーターライダーはかなり気持ちいい。

「ん？」

足下を見ると、水中に何かキラキラしたものが落ちている。

何だ？ペンダント？

確かめようと手を伸ばしたそのとき、悲劇は起こつた。

「きゃーーーーー！！！」

星奈の楽しそうな叫び声と同時に、俺の後頭部に凄まじい衝撃が加わつた。

「ぐはっ！？」

顔面から水中にダイブ！

何が起こつたのか訳がわからず、浅いプールで必死にもがく俺。

どうにか立とうとするも、三半規管が揺られまくつたせいか頭がぐわんぐわんする。

何か支えになるものは！

むにゅ。

やわらかい何かをつかむ。マシユマロのような感触…なにこれ？

目を開けると、俺の眼前には真っ赤になって涙目になっている星奈の顔が。

「あ、あんだねえ……な、な、なにしてんのよー！ー！！」

どうみても俺がつかんでいたのは星奈の胸でした、本当に（以下略

「……ってええええええええええ！？」

「いいから早く放してよ！バカ！アホ！変態！！痴漢野郎！！」

俺は慌てて後ろへ下がる。

星奈は自分の胸を押さえながら今にも泣きそうな顔で俺をにらみつける。

だが待つて欲しい、そもそも俺の頭に衝撃（たぶん蹴り）を加えたのは他ならぬこいつじゃないのか？

……でも結果的に星奈の肉（胸）を触ってしまったのは事実。

「…すまん」

とりあえず謝る。

その後。

口をきいてくれなくなった（正直つらい）星奈は、プールで一心腐乱に泳ぎ続けている。

一方プールサイドで待機する俺。

「にしても…なんつー感触だ」

フニフニでプニプニで… いかん、思い出すと顔が熱くなる。

… ちよつと頭を冷やした方がいいかもしれない。

俺は売店でカキ氷を注文した。

甘ったるい濃い色のシロップ。

イマイチだな…。

カキ氷はやはり家で練乳やカルピスをかけて食ったほうがウマイと思う。

熱を冷まして元のプールコースへ戻ると、星奈が二人の若い男にからまれていた。

茶髪で色黒でキラキラした派手なアクセサリーをつけまくっている、いかにもチャラチャラした感じの男達。

「… またかよ」

ため息をつく。

星奈は外見からして華があるし、男の目をひきつける抜群のスタイルをしている。

これだけ人がいれば、そりゃナンパされるのも当然かもしれない。

まあでも、この前の一件もあったしその辺は上手くやってくれるだろう… と信じたい。

無視する星奈に対して、しつこく誘い続けるチャラ男。

星奈はみるみるうちに不機嫌な表情になっていく。

… こりゃキレるかもしれないな。不安に駆られた俺は、

「あー… そいつ俺の連れなんだけど」

「は？」

なんだテメエと言わんばかりの鋭い目付きで俺を見る二人の男。

「こだった！」

一方うれしそうにキラキラ瞳を輝かせる星奈。

「つーわけで、そういうことだから」

「…チツ」

勢いに任せて、立ち去ろうとする……が、しかし。

「ふふん、残念だったわね！そもそもあんなにちみtainなチャラチヤラした下品で汚くて野蠻で低俗で下種な人種が神聖にして不可侵でエクセレントで至高の存在であるあたしに声をかけること自体が間違いなのよ！」

「つーかなんでそんなに全身黒くしてんの？オシャレのつもり？すっごい気持ち悪いんですケド…うわーキモ！マジでキモいから近寄らないでくれない？」

あー…俺は思わずこめかみを押さえる。

ピクピクと怒りで顔を引きつらせるチャラ男。
また同じパターンか…。

「おい、兄ちゃん」

銀色の趣味の悪いネックレスをつけた方が俺を呼んだ。

「ちよいと、サシで勝負しねーか」

「へ？」

「もしオレが勝ったらその女には今日一日オレ達とつきあってもらう。その代わりオレが負けたらなんでもするぜ」

「いやいや…」

なんでこの流れでガチンコの殴り合いになるんすか。

「これだけボロカスに言われて、黙って引き下がる馬鹿がいるかよ！」

いやまあそれはごもつともですけど…。

しかし俺としては面倒ことは避けたい。

どうしようか…！っそ星奈を変人扱いするのはどうだ？などと思考を巡らせていると、

「受けて立とうじゃないの！小鷹があんたらみたいなモブキャラに負けるわけないんだから！！」

星奈が傲然と胸を張って、男達にドーンと指を突きつけた。

…いやいや何喧嘩に持ち込もうとしてんの星奈さん！？

そして、人目のつかない場所へ移動。
なぜこうなった…。

正直俺はこういう用意されたシチュエーションでガチでやり合つのは不得意だ。

最初にハツタリで怯ませて、短期決戦に持ち込むしかねーか…。
そして相手の色黒男はというと…リズムカルにステップを踏みながら、両手を構えている。

こいつ…どうもこの前のチンピラとは違う気がする。

すると、離れた場所で見えていたもう一人のチャラ男が口を開いた。

「あ、言っとくけどそいつ、最近までボクサーやってたから」

「……………は？」

直後、俺の腹に信じられない重さのパンチが食い込んだ――
|。

…。

……。

……………。

ポツリ。

ポツリ。

顔に当たる水滴で意識が戻る。

俺はゆっくりと目を開けた。

「小鷹……………こだかあ……………」

星奈が、マジ泣きしていた。

口の中に広がる血の味。ああそうか………負けたんだな、俺。
最初の一発を食らったあと、何度か俺は相手の腹に拳を入れることができた。

しかしその腹筋は恐ろしいほどに硬く、まるでダメージを与えられない。

顔を狙ってみるも、あっさりとかわされる。

…そりゃ素人がボクシング経験者に勝てるわけないだろ、常識的に考えて。

はあ。

カッコわる……。

「ごめんなさい………ごめんなさい………」

ぼろぼろと青い瞳から大粒の涙をこぼして泣きじゃくる星奈。
結局あの男達は俺をノックアウトして満足して帰ったんだろうか？
いや、今はそんなことはどうでもいい。それよりも、

「うぐっ………えっぐ………」

星奈を本気で泣かせてしまっている。

まったく情けないな、俺は…。

とりあえず起き上がるか…あ、無理だ。身体中がすげー痛い。

「あたし……全然………こんなことになるなんて………ひっく………」

泣き続ける星奈。そこで俺は、

「…ふえ？」

星奈のほっぺたをつまんでみた。
むにつ。

「大丈夫だつて。だから、もう泣くな」

「……ほんふお？」

「ああ」

俺は手を放す。星奈は目を潤ませながら、

「小鷹っ！！」

思いっきり抱きついてきた。

めちゃくちゃ当たってるんですけど胸とか胸とか！！

てか周りにすげー人いるし皆こっち見てるし！

多大に恥ずかしさを感じつつも、俺は星奈の背中に手を回して応えた。

帰りのバスの中で星奈から聞いた話。

どうやらあのチャラ男（元ボクサー）は俺をノックダウンさせると、

『興ざめだな。……つまんねー』

とかなんとか言っであっさりもう片方を連れて帰ってしまったらしい。

何にせよ、星奈が危ない目に遭わなくて良かったと思う。

…代わりに俺が殴られたけど。

星奈は自分の家で手当てしたいと言ってきかなかったが、そこまでの傷でもなかったし、俺は断った。
そして別れ際。

「ほんとに今日はごめんなさい…。変なヤツが来ても、あたしもう絶対あんなこと言わないから…」

「まあ……気にすんなよ」

しょぼんと落ち込み気味の星奈に向かって言う。

その『変なヤツ』が誰も来なかったらそれに越したことはないんだけどな……。

華があり、垢抜けているのに、世間について知らない。

頭がいくせに、感情に任せて気の向くままに行動する。

なんというか、どうも俺の中で星奈は放っておけない存在になりつつある気がする…色々な意味で。

「じゃあ、また…部室で。バイバイ」

「おう」

腫れた頬をさすりながら俺は星奈に手を振った。

そして家に帰った後、小鳩に大層驚かれたのは、今更言つまでもない。

プール・D E・ダイエット【後編】（後書き）

というわけでプール編終了です。

感想・ご意見その他もろもろありましたらどうぞお気軽に（

、（ノ

それではまた次回！

ボニーテール

夏の夕方。

外の暑さにげんなりしながら、俺はいつもと同じように隣人部部室へやってきた。

扉を開けると、ソファに奇妙な物体が鎮座していた。

「ア、アフロ…？」

俺の記憶が確かならば隣人部にアフロヘアーの知り合いは居ない。つか、いたらこええよ。恐る恐る近づいてみる。

「あ、小鷹！遅いわね、皆もう帰ったわよ」

「なんでこの状況で普通に会話しようとしてるんだお前は…」

やたら整った顔立ちの見覚えのある碧眼美少女が虹色のアフロをかぶっていた。

「ん、なに？もしかしてコレのこと？やっぱりあんたもカツコイイって思う？」

「えっ」

「あたしも最初は何よこのブサイクな髪型！って思ったけど、夜空も理科も幸村も皆カツコイイって言うし…確かにちゃんと見ればかなりイイ感じよねこれ！ワイルドさがあふれてるっていうか」

それどー考えても騙されてるぞ…。ちなみに彼女は学年成績トップ

の天才です。」

「…もしかしてお前、それで帰るつもりか？」

念の為にきいてみた。

「当たり前じゃない」

「没収！アフロ没収！」

「ちょ、な、なにすんのよ！」

さすがに虹色アフロを公衆の面前に晒すという残念行為を看過するのは心が痛む…。

とりあえず人を疑うことを覚えましょう柏崎さん。

星奈の話によると、今日は【髪型を変えてイメチェンしてみよう！大会】だったらしい。

隣人部には珍しい実にガーリッシュな活動内容だなと思った。だが、アフロはないだろアフロは…どこから用意したんだよ。そんなことを考えていると。

「小鷹」

「ん」

「…小鷹はどんな髪型が好きなの？」

星奈がなぜか少し恥ずかしそうにして尋ねてきた。

「俺か？うーん…色々あるしな…」

「ポニテ？それともツインテール？」

「そうだなあ」

「はつきりしないわねもう！そんなだから友達できないのよ！」

どの髪型が一番良いのか答えるのと、何の因果関係があるんだ。

「まったく…しょ、しょうがないわね！優柔不断な小鷹のためにあ
たしが実際にやってあげるわ！」

「はあ」

というわけで。

部屋にある鏡の前に椅子を運び、星奈が座る。

「小鷹」

「？」

「そこにブラシあるでしょ。…と、梳いて」

「ん、ああ…」

小鳩以外の女子の髪を梳くなんて人生で初めてかもしれない。
これはちよつと…緊張するな。

星奈がいつもつけている蝶のような髪飾りを外す。

「……」

「なによ」

「……………誰？」

「柏崎星奈ですけど!？」

「瞬誰かマジでわからなくなりそうだった…。
この髪飾り、地味に存在感発揮してるよなあ。」

「すまん」

「……………いじわる」

ぷくーつとふくれっ面をする星奈。

それはさておき、星奈の髪に触れてみる。

……………なにこのサラサラ具合。

どんなシャンプー使ったらこんなにサラサラになんの？
家で市販の安いシャンプーを愛用している俺には想像できない。

「ふふっ、あたしの神々しい髪に驚いてるみたいね」

「髪だけに神々しいってな。くくっ」

「つね……」

星奈がうんざりした表情をする。……………。

「しかし美容院でも行かないとこんな髪にはならないよな…」

「え？そんなところ行かないわよ。あたしいつも家で切ってもらってるし」

「マジか」

「そーいうのはステラに全部任せてるから」

「ステラ？」

「あたしの家の執事。そういえばあんたまだ会ったことなかったっけ」

…というよりそもそも星奈の家に行ったことが無い訳だが。
入学時は星奈の父親（＝学園理事長）に便宜もはかってもらったし、そろそろ挨拶に行きたいとは思ってるけど。

「てゆーか、早く梳いてよもう」

「あ、悪い」

ゆっくりと丁寧にブラシをかけていく。

シャンプーかリンスかトリートメントか知らないが、ふわっと甘い香りが漂う。

やけにドキドキするな…妹の髪（星奈と同じブロンド地毛）をセツトしても何も感じないのに。

ふと、鏡に写る星奈を見る。ブルーの瞳、白い肌、日本人離れした顔立ち。

なんつーか、まるで人形みたいに綺麗だな。

「なっ…!」

突然顔を真っ赤にする星奈。

「に、人形って……い、いきなり何言ってるのよバカ!」

「へ?」

どうやら思ったことがそのまま口から出ていたらしい…マジっすか。

「でも……小鷹に綺麗って……あう……」

下を向いてなにやらモジモジしている。

……星奈?

「ゴ、ゴホン!さて最初は何の髪型にしようかしら!」

よくわからないが、テンションを無理に上げている感がハンパない星奈だった。

○ ツインテール

「いいわよ」

読んでいた本を閉じて、俺はセッティングを終えた星奈のほつを振り返った。

「じゃーん!どう?小鷹」

「おー…」

…正直びっくりした。髪型を変えるだけですげー印象変わるな…。長いブロンドの髪が左右に分けられ、それぞれ綺麗に髪飾りで留められている。

ストレートロングの時よりも、なんというか、少し幼い感じがする。

「なかなかいいんじゃないか」

俺が感想を述べると、星奈は

「べ、べつに嬉しくなんかないんだからねっ!!」

ビシッと指を突きつけてこう言った。

「……………あ、はい」

「『あ、はい』じゃないわよ!? ツインテールって言ったらツンデレに決まってるでしょうが!」

怒られた。

確かツンデレってあれだよな、二人のときはツンツンで他に人がいたらデレデレに…あれ? 逆だっけ?

「でも星奈ってそーいうの似合うよな」

高飛車な雰囲気とそのツンデレとやらの結構マッチしてると思う。

「えっ?」

首を傾げる星奈。

「あたし……いつもそんなにトゲトゲしてるかな……」

「ん？」

「な、なんでもないわよっ」

彼女はぷいっと顔を背けた。

○ ツーサイドアップ

「どうかしら？」

「へえ……」

次は、両サイドの髪の一部をちょこんと結び、残りをまっすぐ下ろしたヘアスタイル。

一見すると上品で清楚なお嬢様、といった印象を受ける。

「つか実際星奈はお嬢様なんだよな……上品で清楚なのはこの際置いておくとして。」

「にしても……ツインテールとよく似た髪型なのに、受けるイメージは全然違うな」

「言っとくけどツインテールとは完全に別物だから。変な誤解しないで」

「俺にはほとんど同じに見えるけど……」

「はー…これだからニワカは困るわね」

ヤレヤレといった表情の柏崎さん。

「ツインテールは昔からのテンプレートなツンデレキャラに多いけど、ツースайдアップはツンデレだけじゃなくて例えばクール系とか無表情系のキャラにもフィットするし、おっとりしたタイプの女の子にも」

知らんがな。

「でね、ツースайдアップにもロングヘアタイプとセミロングタイプがあつて、お嬢様キャラだと前者のケースが多くて、後者は活発で素直な」

「いや、そこまで説明いらねーから…」

放っておくと延々と続きそうだったので俺は慌てて制止した。

○ ポニーテール

「んしょつと…いいわよ、小鷹」

振り向いた俺は………驚愕した。

すげー……めちゃくちゃ可愛いじゃねーかー！

高い位置でまとめ上げられたキラキラと輝きを放つ金髪。青い蝶の髪飾りが程よいアクセントになっている。

「どっ?」

くるっと1回転する星奈。長いテールがふわっと揺れる。
プールでも見ることのなかった星奈のポニテ。

……………素晴らしい!ワンダフル!ビューティフル!

ポニーテール自体はそれほど珍しいヘアスタイルじゃない。むしろ
ありふれた方だと思う。

なのに、なぜ星奈のポニーテールはこんなに魅力的に感じるんだろ
う?

そーいや俺が星奈のギャルゲや小鳩のアニメで見た記憶を辿れば、
ポニーテールをしているのは大体明るく活発なキャラクターだった
… 加えて俺のクラスでも常時ポニテの女子は明るい感じの子が多い。
なるほどな… 星奈はポジティブだからな… いろんな意味で。
似合うのは当然かもしれない。

「なにになー?もしかしてあんたポニテに萌え萌えだったりするの
?」

ニヤニヤと笑みを浮かべる星奈。

いつもならイラッとくるような態度も、今はかわいいと思える不思議!
いやーほんとに… 星奈、可愛いよ。

「星奈、可愛いよ」

…………… あ。また言葉に出てしまった。

「……………ふえ？」

彼女は目を丸くし、そしてボツと火がついたように顔を真っ赤にして、

「か、か、か、かわ、かわいって、その、あの、えと」

「いや、その、これはポニーテールの星奈が、じゃなくて星奈のポニーテールが」

何を言ってるのかよくわからなくなってきた…。

「…どんだけ好きなのよ」

頬を紅く染めた星奈がジト目気味でそう言った。
そして目線を泳がせつつ、彼女は小さめの声で、

「……よ、よかったら、しばらくポニテにしてあげても…いいけど」

「……………マジで？」

「……………うん」

「いやっほっ！」

「……………」

星奈は呆気にとられている様子だったが、俺の気分は実にハイだった。

……恐るべし、ポニーテール。

ポニーテール（後書き）

7巻のカラーイラストがかわいかったので勢いに任せてかきました
(・・)

ponytail tale (前書き)

今回は星奈視点のお話になります。

前回の「ポニーテール」の続き？みたいな感じです。
それではどぞ。

ponytail tale

「ん」

結ぶ位置がちょっと高い気がする…。

「こつ?」

今度は低すぎるような…。

「ていうか、そもそも前髪少なすぎでしょこれ!? あーもー!」

ため息をつく。シンプルな髪型の癖になかなか自分の思う形にならない。

やっぱりやめよっかなーポニーテール…。

ってダメダメ! 一度言ったことを撤回するなんてあたしのプライドが許さないんだから!

それに… あいつも… か、かわいって言うてくれたし…。

「あきらめるのはまだ早いわね! よーし!」

鏡に映る自分に向かって気合を入れる。そうよ、たぶんよく見えるコツミたいなものがあるはず!

「お嬢様」

「わあっ!?!」

不意に真横からぬっと現れるステラ。

びつくりしたー…気配消しすぎでしょ 안타…。

「は、入るときはノックくらいしなさいよね!？」

「20回ほどノックしたり呼びかけたりしましたが、何の反応もありませんでしたので」

「え」

マジで?全然気付かなかったけど…。

「で、何の用よっ」

「昼食のご用意ができました」

「…わかった。行くわ」

食堂へ向かう。絶対ステラに見られてたよね…はあ。

今日はパパは朝から出かけていて留守。

広い食堂でぼつんと一人で食べるのは結構さびしいものがある。

食べ終わって食後のコーヒーを飲んでみると、側で控えていたステラがいつもの無表情で、

「ときにお嬢様。好きな人でもできたのですか？」

「ぶっ!?!げほっ、えほっ!」

思わずむせる。

「な、なにゆをいつてんによかしらね!？」

そばにあったナプキンで口元のコーヒーをぬぐう。

す、好きな人なんて…何言つてんのよバカねもーそんなわけないじゃない!

ありえないから!超ありえないから!

…。

……。

「……………いつから見てたの?」

「お嬢様が『むずかしいわねー』と仰っていた辺りからでございます」

「う……。ほ、ほらたまにはヘアスタイルを変えてみるのもいい気分転換になるかなーと思つて…あはは」

じーつとあたしを見つめてくるステラ。全てを見透かすような目。

…隠せるわけ無いわよね、一番あたしを知つてる人だし。

こつなつたら、もはや残された手段は一つだけ。

「…………ステラ」

「なんでしょう」

「あたしに、最高のポニーテールの結び方おしえて!」

「わかりました」

そう言うステラは、ほんの少しだけ微笑んでいるように見えた。

学園へ向かうバスの中。夏休みの昼間なので乗客はほとんどいない。コンパクト（もちろんブランド製！）を片手に入念に髪をチェックする。

髪留めがビミョーにゆがんでるわね。しょ……っと。

うん、バッチリ！

小鷹のヤツ、どんな反応するかしら？

ふふっ、楽しみね。

昨日よりも、褒めてくれたら、うれしいな…。

期待に胸を躍らせて、いつもの部室、談話室4のドアを開ける。

「……………あれ？」

誰も居ないし！ま、まあ昨日は小鷹は夕方に来たし…待ってればそのうち来るわよね。

途中夜空が来たけど、あたしのポニテには一切触れてこなかった。

少しは気にしてよ！バカアホしねー！

空が夕日に染まっていく中、あたしは一人携帯ゲームをプレイする。

『好きな人でもできたのですか？』

ステラの言葉を思い返す。

そりゃまあ、プールに行ったとき小鷹のことかっこいいって思ったのは事実だけど…。

2回目のプールであいつがボコボコにされて本気で心配しちゃった

のも事実だけど。

一緒にいると、うれしくて、楽しくて仕方ないのも事実だけど！

でも…それってあたしが小鷹に対してLOVEって意味なのかな…？
わからない…だって今まで男の子を好きになったことなんてないし。

うーん。

ふーん…。

むむむ…。

うがー！やめやめ！考えても無意味だわこんなの！

つたくもーあのヤンキーは何やってるのよ！早く来なさいよ！

ガチャッ。

「悪い、遅くなっ……………た？」

ドアの音に気付いて振り向くと、あいつが立っていた。
ポカーンと口を開けて突っ立っている。

「ばーか」

あたしは言っちゃった。すでにもう日は暮れかけている。
どんだけ待たせるのよ…ほんとにバカね！大バカよ。

「ま……………」

「ま？」

「まさか、本当にポニテをやってくれるとは…」

「はぁ！？」

あんなに喜んでおいて疑ってたの！？地味にショックなんですけど！

「こ、このあたしが約束を破るなんてマネするわけないでしょーが」
「！」

「ああ、そうだな……いやいやマジで」

そして小鷹はニカツと笑って、

「最高だな！星奈」

親指を立てて、そんなことを言ってきた。

な、なによ…その笑顔は…ドキドキするじゃない。
これだけでも今日頑張った甲斐はあったかな…。
胸が高鳴るのを感じながら、あたしはそう思った。

ponytail tale (後書き)

星奈sideの話はランダムな英語か歌のタイトルにしようか検討中：とりあえず目次で区別できそうならいいかな！。

メール？

夜、夏休みの宿題をやっていると、携帯のメール着信音が鳴った。確認する。星奈からだった。

…というか、星奈以外からメールがほとんど来ない件。

隣人部メンバーとアドレス交換をした当初は理科ともメールを交わしていたが、あまりにも変態メールばかり送りつけてくるので俺がうんざりしてスルーすると、向こうも送ってこなくなった。

一方で星奈とのメールのやりとりは普通に楽しくて、ずっと続いている。

メールを開く。

FROM 星奈

TITLE 無題

おハロー！○○○○

…最近やたらとこのよくわからない挨拶(?)を使ってくる。

【おはよう】と【ハロー】をかけているんだろっか？

しかしどちらも夜に使うような挨拶じゃないという…謎である。

まあ、テンションの高い星奈には似合っていると思うし、深く考えないことにする。

FROM 小鷹

TITLE おー

どした？

FROM 星奈

TITLE 明日
スタバ行かない？

星奈とのメールでたびたび思うのは、こいつは結論から入るのが多いな—ということ。
星奈らしいといえば、らしい。

FROM 小鷹
TITLE RE
スタバって…今夜空が言ってたアレか？

回想5時間前。 in 部室。

『と、いうわけでどうやら世間のオサレなリア充共は【スタバ】に頻繁に通っているらしい』

『スタバって…単なる喫茶店だろ？リア充と関係あるのか？』

『甘い小鷹。スタバはそこらにあふれるシヨボイ喫茶店とは訳が違うぞ。いわばリア充御用達のスペシャルグレートカフェだ』

『なんかすごそうだな…』

『将来リア充になったときに備えて、我々も予行演習を行う必要があるかもしれないな』

『なんでわざわざ店でコーヒーなんて飲むの？てゆうか、あたしの家なら』

『死ね肉』

回想終わり。

FROM 星奈

TITLE RE2

そう。どんなところか気にならない？

FROM 小鷹

TITLE RE3

夜空いわく、スペシャルでグレートな喫茶店らしいな…。
そうだな、明日隣人部みなで行ってみるか。

FROM 星奈

TITLE むー

(#、ー)

あ、怒っていらっしやる…。

FROM 小鷹

TITLE じゃあ

明日二人で行ってみるか？

FROM 星奈

TITLE えへへ

O(*^ ^*)O

あいかわらずわかりやすいな…。

でも、星奈のこういう素直なところは俺は結構好きだったりする。

そんなわけで、明日は星奈とスタバ（正式名称は「スターバックス
コーヒー」）に行くことになった。

メール？（後書き）

絶対星奈は顔文字好きですよ、まちがいない。

スタバに行こう！【前編】

翌日。遠夜駅前の広場で俺は待っていた。
待ち合わせの時刻から10分ほど経過。

一人の女の子が金髪のポニーテールを揺らしながら走ってきた。
柏崎星奈。俺の所属する隣人部のメンバーだ。

「ごめん、遅くなっちゃった」

「気にすんなよ」

むしろ走るたびにバインバインと揺れる胸を気にしてほしいところである。

思春期の男子にとっては目のやり場に困る事この上ない…。

2度目のプール以来の私服姿の星奈。

トップスは淡いピンクのキャミソールで、胸元に花柄のレースがあらわれている。

ボトムスはデニムのショートパンツで黒のニーハイソックスとパンプスもいい感じ。

一言で言うところ、可愛い。

そして、なんかエロい。特にニーハイ。

なんつーか、こう…アレだ、ムチムチしてる感がすごい。けしからん。

「……はっ」

なぜか星奈にじーっと見られている気がして、慌てて俺は顔を上げる。

ニーハイもいいけど、このポニーテールの破壊力もでかい。

1週間前に約束(?)を取り付けてから、星奈はずっとそれを守ってくれている。

そついや私服姿でポニテって初めてだよな…改めてその素晴らしさに気付かされる。

「イイなあ、それ」

「でしょー？ふぶん、このキャミソールあたしもお気に入りなのよね！」

「えっ」

「えっ」

「いや、ポニーテールのことなんだが…」

「……………はあ？」

このヤンキー何ほざいてんのとでも言いたげな目で星奈は俺を見る。俺なんか酷いこと言っただけ…？

「あんたホントわかってないわね…」

「わかってないってなにg」

「もーいいわよ！ふーんだ！」

唇をツンと尖らせてそつぽを向く星奈。釈然としない…。

そして俺と星奈は歩き出した。

10分後。交差点の角にある一軒の店。

「ここだな、たぶん」

緑色の看板にでかかと『STARBUCKS』の文字が書かれている。

「へー、なんかパツとしないわね」

「そうか？オシャレな感じの喫茶店じゃないか」

「わかってないわねー小鷹。ギャルゲでも緑色のヒロインは大抵パツとしないもんなのよ」

「何の話だよ…」

星奈のギャルゲ論を軽く流し、いよいよ未知の領域へ。いったいどんなリア充空間なんだろうな…緊張するぜ。

「いらっしやいませー」

「おおお…」

なんだこのローカルな喫茶店とは全然違うオシャレな雰囲気は！思わず困惑する。

それに比べて星奈の落ち着き振りときたら…こういう洗練された場

所には慣れてるんだろうな。
やはりお嬢様だけある。

「さ、早く空いてる席に座りましょ」

「あ、ああ…」

しばらく待つ。が。

「店員こねえな…」

「おつかしいわね…何やってんのかしら」

あまり考えたくないことだが、ひよつとして…。

「なあ、俺たち金髪ヤンキー……カップルとも思われて避けられてるんじゃないか？」

俺の目付きのことも考慮すると、十分にあり得る。

「は、はあ？力、カカカカップルって！そんなことあるわけないでしょ——！」

星奈は顔を真っ赤にして否定する。

「そう見られるのも……悪くないかもしれないけど……」

うつむいてモニヨモニヨ何か言っている…すると、

「あーもうムカツクわね！店員呼んで来る——！」

バツと立ち上がって、カウンターレジのある方へズンズンと向かっていった。

…と思つたらすぐに一人で戻ってきた。

星奈は恥ずかしそうに頬を染めて目を逸らしながら、

「……先にカウンターで注文するんだって」

えっ。

喫茶店つて普通店員が注文取りに来るもんじゃないの？
驚愕の事実だ…。

そんなわけでカウンターへ移動する。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

「えーと…」

目線をさまよわせながら、俺は差し出されたメニューに目をやる。
コーヒー、エスプレッソ、フラペチーノ、ペストリー…なにやら専門的な匂いを漂わせるワードが並んでいる。

「とりあえず……………」

俺は悩んだ挙句、

「……………コーヒーで」

「あんたねえ……」

不満そうな顔をする星奈。喫茶店でコーヒーを頼んで何が悪い！
シンプルイズベスト、これ以上の選択肢は無いだろう。

「アイスになさいますか？それともホットにされますか？」

「ホ…い、いやアイスで」

この暑いのにホットはないだろ…危ねえ。

「サイズはいかがされますか？」

サイズ…考えてなかった。メニューをもう一度見る。

S・T・G・V…なんだこの見慣れないアルファベットは…S M L
じゃねえのかよ…。

「えー、あー…」

「ちよつと小鷹！」

星奈に袖を引っ張られ、離れた場所へ連れて行かれる。

「な、なんだよ」

「あんな店員のドまん前で悩むなんて恥ずかしくないの？一度こ
で作戦を立てたほうがいいわ」

<作戦会議？>

「SはスモールのSだろ…T・G・Vってなんだ？」

「TGV…フランスの高速鉄道の略称でそんなのあったわね」

「…なんで喫茶店のメニューに鉄道の名前が出てくるんだ？」

「知らないわよ！」

「やっぱりTもGもVもサイズの頭文字なんじゃないのか」

「むー…T…あ、これってTinyのTじゃない？」

「Tiny…スモールより小さそうな感じだな。じゃGは？」

「えーっと…ジャイアント？」

「ラージに相当するのがG…となるとVはミドルサイズか？」

「でもそれならGが一番値段が高いはずよね…」

「た…確かに」

メニューだとS↓T↓G↓Vの順で値段が高くなっていく…謎だ。

「ひょっとしてVって…VictoryのVじゃない？」

「Victory…勝利？なんだそりゃ」

「つまり勝ち組にふさわしい豪華仕様ってことよ！だからきつと一番高いのよ」

「勝ち組…リア充っぽい響きだな。よしそれにするぜ!」

こうして俺はアイスコーヒーのVをオーダーした。

店員さんがVictoryとは違う単語を言っただような気がするけど、たぶん気のせいだな。

次は星奈の注文。

「エクスプレッソのVで」

星奈は前髪をかき上げ、その表情は自信で満ちあふれている。

おお…ハイソサエティのオーラを感じるぜ…。

すると店員は当惑した顔つきで、

「えっと、エクスプレッソですね? ソロとドッピオがごじますが…」

「……………えっ」

<作戦会議?>

「なななななによド・ド・ド・ドッピオって!？」

「お、落ち着け星奈! ドッピオは俺もわからないけど、ソロなら聞いたことあるぞ」

「ソロ…一人用ってこと? じゃあドッピオは二人で飲む用って感じかしら?」

「というより二人分がいつぺんに出てくるって意味じゃないか?」

「つまり、あの女は不可解な単語を使って小鷹の分までエスプレッソを注文するように仕向けてるわけね…」

「その可能性は高そうだな…」

「売り上げのために無知な客を虎視眈々と狙ってるなんて…恐ろしい店だわ」

そしてまた戻る。

「エスプレッソ…ソ・ロ・で！」

怒り口調で星奈が言う。まあ不要なものを勧めてくるのは俺も良くないと思う。

会計を済ませて、オーダーしたものをそれぞれ受け取る。

……が。

「でけえ…なんだこれ…」

「何なのよこのちっこいのは！！ふざけてんの！？」

俺のアイスコーヒーはなぜかやたらとデカイ一方、星奈のエスプレッソは逆になんつか…非常にショボイ。

手のひらサイズのカップにちんまりと注がれていた。

……どうしてこうなった？

「こんなの詐欺じゃない！金かえせー！」

「お、おい……とりあえず席に座ろうぜ！な！」

全力で抗議する星奈を引つ張って、空いてるテーブル席へ。

がつくりと肩を落とす二人。

予想もしないヘンなものが出てきてしまった。

やっぱり、リア充行きつけの店なんて俺たちには早かったんだな……。無念。

スタバに行こう！【前編】（後書き）

かくいう自分も小学生の頃はずっとエクспレッションだと思ってました。

後編へ続きます！

スタバに行こう！【後編】

というわけで。

色々あって、俺達は最初に想像していたヤツとは全然違うものを飲む羽目になった。

「うう…女神であるあたしによくもこんなしょぼいコーヒーを…」

半泣き状態で星奈が言う。

「まあ、量は少なくとも味は一流という可能性も…」

「マジでっ？」

…すまん、適当。

ちびちびとエスプレッソを飲んでいく星奈。さて、そのお味は？

「……………マズ」

現実残酷でした。

「苦いし濃いし……サイツツアク！」

「俺のほうも地味にきついんですけどね…」

俺の前に立ちはだかる巨大なカップ。

っ！か飲みきれるのかよ、これ…。

10分経過。出した結論は。

……無理！

どうにか3分の2くらいを胃に流し込んだが、これ以上無理です。気が引けるけど、残すしかないか…と思ったそのとき。

星奈が胸の前でもじもじと両手の指を動かしながら、

「ね、ねえ小鷹」

「ん？」

「よ、よかったらあたしが飲んであげてもいいけど」

「おお、それは助かる」

確かに星奈的にはこんなちっさいやつだけじゃ物足りないだろう。

「じゃストローとってk」

「ダメーーーーーッ！！」

全力で阻止された。

あまりの大声に周りの人間がぎょつとした顔でこっちを見ている。

「……星奈？」

「だ、だから、なんていうか、新しいストロー使うなんてもったいないってゆーか！いわゆるひとつのエコロジー？みたいな！？」

星奈は顔を真っ赤にしてあたふたしている。

エコロジーって…釈然としないが、そのままカップを差し出す。すると星奈は、唇に人さし指を当てて熱っぽい目でストローの先を見つめている。

「……………どうした？」

「ふえ？あ、このストロー面白い形してるなーって…あはは！」

まっすぐなストローに形も何もないだろ…ん？待てよ。これって。

…。

……………。

……………間接キスじゃね？

今更気付いた。

まずい、急にドキドキしてきた。

「な、なあ。やっぱり新しいやつに…」

「ダメッ！絶対ダメなんだからっ！」

ふるえる手でカップとストローを持つ星奈。

そしてストローに、そっと口をつけた。

10秒ほど星奈は固まっていたが、ゆっくりとコーヒーをすすりはじめる。

ふと目が合う。

たちまち星奈の顔が火がついたようにボツと赤くなった。慌てて俺も視線を逸らす。

見ているだけなのに何か俺まで恥ずかしくなってきた…。

とうとう星奈は最後までストローから口を離すことなく、一気に飲んではまった。

「……美味かった？」

「あ、あ、味なんてわかるわけないでしょバカア!!」
「ですよね…。」

「……」

「……」

沈黙。

…なんつーか落ち着かない。顔が心なしか熱い。

星奈を見ると、頬を紅潮させて、俺をチラッと見たり、うつむいたり、左右をキョロキョロしたりしている。
かわいいなオイ。

「よ、よしそろそろ帰」

「待って小鷹!」

席を立とうとする俺を星奈が呼び止める。

彼女は大きな瞳をつるませながら、

「お願いがあるの……」

その後。

俺と星奈はカウンター席に移動し、目の前にはアイスコーヒー1つとストロー2本。

「……で、いったい何が始まるんですかね」

妙な胸騒ぎを覚えつつ、俺は星奈に疑問をぶつけた。

「ひ、一つのドリンクを2人で一緒に飲んだら、さらにエコロジーだと思わない？」

上ずった声であさつての方向を見ながら、訳の分からないことをおっしゃる星奈さん。

「え……」

動揺する俺を尻目に、星奈はカップのフタを取り、パパッとストローを2本突きさす。
おいおいおいおい。

「周りに人すっげーいるんだけど……」

「バ、バカねっ！ど、ど、ど堂々としてればいいのよっ」

めちゃくちゃうろたえてるじゃねーか！

………わかった。腹を決めよう。

俺はカップを持って、ストローをくわえる。

続いて、星奈がストローに唇を………つけた。

近っ……！！

ちけえよ……！！

至近距離ってレベルじゃない……すぐ目の前に星奈の顔がある。

ガラス玉のような澄んだブルーの瞳。

長い睫毛。

透き通るような色白の肌。

うつすらとルージュのひかれた艶やかな唇。

こんな美少女が間近に迫っていてドキドキしないわけがない。

心臓の鼓動が加速していく。

つかこの状況でコーヒーなんて飲めるか！

一方星奈は顔を赤らめて、健気にも少しずつ飲んでいた。

時折上目遣いでじーっと見つめてくる。

………なんだこの反則的な可愛さは。

端正な顔立ちに色っぽさと子供っぽさがあわさって恐るべき相乗効果を生み出している。

………ダメだ。耐えられん！

結局数分でほとんど飲めないままギブアップした俺だった。

「ちょっと何やってんのよ！ばかつ」

横で星奈が怒っているけど、俺にはまだレベルが足りないと思う…。

ガラスの向こうの歩道では、携帯を片手にサラリーマンが冷めた目でこちらを眺めていた。

違う、違うんだ、俺達はそーいうアレじゃなくて…。

…どーいうアレだよ。

一人ツツコミを入れる俺。

ちなみにそのコーヒーは星奈が半分ほど飲んで廃棄処分となった。すいません、スタバさん…。

そして、俺と星奈は店をあとにした。

スタバに行こう！【後編】（後書き）

間接ではなく直接の方はいいいつになるやら…ではまた次回！

おそろい（前書き）

スタバのお話の続きになります。どうぞごゆるりとお楽しみください。

おそろい

店を出ると、むわつとした熱風が吹き付けてきた。
思わず顔をしかめる。

携帯を開き時刻を確認すると、まだ昼の2時前だった。
遠夜まで来て喫茶店に寄っただけで帰るっていうのも……ちょっと寂しいような。

「なあ、星奈」

「なによっ」

ぶっきらぼうな声。

さっきのことでまだ怒ってるんだろうか……。

「今日、これから予定とかあるか？」

「べ、別にないけど……」

「じゃ、どうか寄って行こうぜ。俺も今日ヒマだし」

「……え」

一瞬ばかりとしたあと、

「うんっ」

星奈は子供のような無邪気な笑顔で微笑んだのだった。

駅前の商店街を二人並んで歩く。

この商店街には過去何度か来たことがある。

友達と一緒に…でもなく、妹と…でもなく、もちろん一人でだったけど。

それが今同じ年の女の子と二人で来ている…なんだか、不思議な感じだった。

「……………」

「……………」

こういうとき何話せばいいんだろうな…ジーンズのポケットに手を突っ込みながら考えていると、

「……………ね、ねえ」

星奈が地面に視線を落としたまま、ためらいがちに言った。

「ん？どした」

「あの、さ……………て、て……………」

て、て、て…？

俺が疑問に思っていると、

「……………なんでもないっ」

頬をぼわっと染めてそれっきり黙ってしまった。…なんなんだろう。

しばらくすると、デカイ本屋が見えてきた。

ジャンク堂遠夜店。品揃えのよさでは市内で一二を争う大型書店だ。

「入ってみるか」

「うん」

何の気なしに言ってみると、星奈はこくんとうなずいた。

自動ドアをくぐり、エスカレーターに乗って3階へ移動する。

3階はマンガやライトノベルやゲームの攻略本などのフロアになっている。

「あつ！これって」

星奈がライトノベルコーナーに平積みされていたうちの1冊を手にとった。

「ノベライズもう出てたのね！知らなかったわ」

星奈が手にしている本の表紙には、執事服(?)が半分脱げかけている状態の女の子が描かれていた。

かわいらしくて、少しエロい。

「なんだこれ」

俺が言つと、星奈は嬉しそうにニマニマしながら、

「あんた知らないの？美少女ゲーム『チキマヨ』のメバルちゃんよ！」

チキマヨ？その名前を聞いて、俺はなぜかおにぎりの具を連想してしまった。

星奈はパラパラとページをめくっていく（ジャンク堂は立ち読みオケー。器の大きい店だ）。

そして、挿絵のイラストを眺めながら、

「ああん、もう、メバルちゃんか〜わ〜い〜い〜！ペロペロペロペロしたくなっちゃうー！！」

目に星マークを浮かべ、うつとりした表情の星奈。

本当にペロペロしかねない勢いだったので、俺は慌てて話題を振る。

「つ、つかお前もこういうの読むんだな！」

「ラノベは割と好きね。マンガは読まないけど」

「どんなラノベ読んでるんだ？」

「そうねーペロペロしたくなるキャラがいるやつかしら」

わかんねーよ。

「『俺の妹がこんなに可憐なわけがない』とか『僕の妹は英語が読める』とか『この中に2人、妹がいる！』とか」

「妹ばつかじゃねーか！」

「どんだけ妹キャラ好きなんだこいつは……」。

「ま、あたしの本当の妹は小鳩ちゃんだけだねっ」

「いや違うから……」

悪戯っぽく笑う星奈に向かって、冷静にツツコミを入れる俺だった。

しばらく立ち読みしてから、俺と星奈は本屋を出て商店街へ戻った。

……にしても、暑い。

太陽の光が屋根のおかげで遮断されているにもかかわらず、ムシムシした暑さがねっとりとまとわりついてくる。

冷たいアイスとか食いてーな…。

すると、巨大なソフトクリームの模型を見つけた。

カウンターの脇のメニューにはアイスクリームやクレープの文字が並んでいる。

「なんか食おうぜ」

呼びかけると星奈は、

「そうね……じゃ、じゃああたしソフトクリームで」

なぜか目を伏せ気味にして、恥ずかしそうにしている。

よくわからんけれど俺もソフトクリームが食いたかったので、

「すみません、ソフトクリーム【2つ】」

オーダーする。店員は手慣れた手付きで作り、あっという間に完成。

「はい……っておい？」

渡そうと思ったら星奈はめちゃくちゃ残念そうな、やりきれないと
言った顔をしている。

これソフトクリームだよな。注文間違っただけだよな……。

渡すと、豪快にバクバクと食べ始める星奈。

俺も自分のクリームにかぶりつく。ヒンヤリしていてウマイ。

ふと星奈を見ると、クリームを口の端にべっとりとつけていた。

これは恥ずかしい……。小さな子供ならまだしも、高校生でこれはない。

ちよつと迷った末、俺は星奈の口についているそれを指でぬぐってあげた。

「\$%∞£ ÷@ !!!!!!!」

すると、星奈は声にならない叫びを上げた。

そこまで驚かなくてもいいだろ……。

彼女は顔を真っ赤にして、目を白黒させながら、

「な、な、な、な、な、な、なにしてんのよ!!」

「いや、クリームついてたから」

「い、い、いきなりにもほどがあるわよ!ばかつ、ばかつ」

バカバカ連呼される。思い返せば今日20回くらい言われてるんじ

やないか俺……。

「うう……もお……」

唇をきゅつと噛みしめて泣きそうな顔でにらみつけてくる。

「…俺のソフトやろうか？」

「いらないっ」

ふいつと顔を背ける星奈。ポニーテールがふわつと揺れる。

「いまさら遅いつての……」

「ん？」

「なんでもないわよ……アホ！」

バカから今度はアホに変わってしまった。やるせない。

クリームを食べ終え、続いて商店街をブラブラ歩く。
もうすぐアーケードも終わりというところで、

「……ねえ」

星奈に服の袖を引っ張られた。

「あそこ」

彼女が指差した先には、ピンクの看板が目を引く華やかな感じの店があった。
入り口の脇に可愛いウサギの絵が描かれたボードが置かれている。

「……気になる」

星奈がぼつりとつぶやいた。

俺は直感的に入りづれえな……と思った。

まあでも星奈もいるし、俺もどんな店か多少気になる。

というわけで入ってみることに。

中は、なんとというか……分かりやすく言うと女の子一色の空間だった。
ファンシーショップっていうんだろうか。

可愛いアクセサリーや小物、文房具、ぬいぐるみなど様々なグッズが並んでいる。

どう考えてもヤンキーに間違えられる目付きの悪い男が居ていい場所じゃない……。

どうも気分が落ち着かない俺とは対照的に、星奈は興味ありげにグッズを眺めている。

こいつもこういうのに興味あるんだ……。

普段ギャルゲや美少女ゲームに夢中になっているイメージが強いせいか、意外に思う。

ふむ……そうだな。

今日は星奈を何度も怒らせてしまったし、ここは何かよさげなグッズを買ってやろう。

あとから店に入ってきた少女達のキャピキャピした声に戸惑いながらも、俺はじつくりと物色していく。

文房具……は地味だな。

ぬいぐるみ……は星奈が好きそうに思えない。

というか、ここにある商品であいつが好みそうなものが全く分らない。

全然星奈のこと知らないな、俺……そんなことを考えていると、ふいにあるモノが目に残った。

銀色の星型のペンダント。

デザインはシンプルだけどオシャレで、かわいいと思う。それに……。

「星奈」

「んー、なに？」

「これ、どう思う？」

俺はペンダントを見せる。

星奈はじーっとそれを見つめた後、

「……いいんじゃない」

気のせいか、顔がほんのり赤く染まっているような。

「試しに、つけてみてくれ」

「え？え？な、なんであたしが」

「俺がつけてどうすんだよ。ほら」

ペンダントをかけてやる。

「ど、どういっつもりよっ」

星奈はしどろもどろになって俺とペンダントを交互に見やっている。

「似合ってるしいいじゃないか。それに、アレだ、星奈の名前とピッタリだと思うし……」

『星奈』だから『星』のペンダント。

……ぶっちゃけそれで選んだ気がしないでもない。

少し気恥ずかしくなって頭をかいていると、星奈は顔を真っ赤にしてプルプルと震えながら、

「……こだかも」

「へ？」

「小鷹も、つけて」

んんん？　いったいそれはどーいう…。

「あ、あたしも小鷹にこれ買っただげる……」

もじもじしながら、小さな声で星奈が言う。

まあ、別に俺はこういうアクセに抵抗無いし、オシャレでいいと思うけど。

……同じものつけんの？

胸がドキドキしてくる。

余程の仲じゃない限り、こんなことしないよなフツー……。

額に指を当てて考え込んでいると、

「はい！」

星奈の声。振り向くと、彼女はすでに買い物を終えていた。その手にはペンダントの入った袋がある。

「小鷹も、はやくっ」

「わかった」

俺も同じものを購入する。

店の外で俺と星奈はそれぞれ買ったものを渡しあった。

「今、つけちゃおっか？」

まるで子供のように目をキラキラと輝かせて星奈は嬉しそうに言った。

俺はうなずく。

同じ銀色の星のペンダント。

星奈の名前が入っている『それ』は俺にとってすごく特別なものを感じられた。

つけてみると、正直、胸の高まりがヤバイ。どーするよこれ……。そして星奈は、頬を赤らめてペンダントを指でコロコロといじりながら、

「えへへ……」

恥ずかしそうにはにかんだ。

その屈託のない笑みに思わずドキツとする。

「そ、そろそろ帰るか」

動揺を隠すように俺は提案する。

……まだ4時にもなってなかったが。

「うん……」

星奈が星型のペンダントチャームを愛しそうに見つめながら、言った。

帰宅。小鳩は俺が戻ってくるなり胸についたペンダントをしげしげと眺めて、

「あんちゃん、それはなんじゃ？」

「秘密」

「むー。……はっ、もしや貴様我が下僕に分際で神の手先から聖な

る五芒星を」

「はいはい」

五芒星じゃなくて普通の星型です。

部屋に戻りベッドに横になる。今日はいろいろあったなあ……。

怒ったり、笑ったり、泣きそうになったり……星奈のいろんな表情が脳裏に浮かんでくる。

「いいよな……こういうの」

天井をぼんやりと見ながら、俺は呟いた。

おそろい（後書き）

このペンダントは重要なキーアイテムになってくる…かも？次回は星奈sideのお話にする予定です。

Groovin' Magic 【前編】（前書き）

スタバに行こう！【前編】の星奈sideの話です。今回書いて楽しかったです、はい。

Groovin' Magic 【前編】

『了解。じゃ、また明日な』

小鷹からのメールに、『うん。おやすみ』と返信する。

…。

……。

しばらくケータイの画面を見つめたあと、あたしは無言でガッツポーズをしていた。

だって明日は、小鷹と二人きりで……デ、デ、デデデデートとかそんなじゃないわよバカ！

ちよっとリア充御用達のカフェがどんなものかリサーチに行くだけなんだからっ！

……誰にツツコンでるのよ、あたし。

それにしても、隣人部一同じゃなくてほんと良かったわ。

他のコも一緒だったら雰囲気も何もあつたもんじゃないし。

……明日は何着ていこうかな。

スタバだけじゃなくて、他にもどこか行ったり、なんて……。

デートじゃないのに、なぜかワクワクして目が冴えてしまう。

結局、あたしが眠りに就いたのは夜中の0時を回ってからだった。

次の日。

入念にメイクを済ませ、今日着ていく服を選ぶ。
どうしよう……。

あつ、このワンピースかわいい！フリフリで清楚な感じ……でもちよつと乙女チックすぎるかも。

やっぱりキャミソールとスカートが一番無難かな……。

けど前もその組み合わせだったし、新鮮味がないような気も。

スカートよりショートパンツのほうがいいかな？

てゆーか、小鷹はどんなファッションが好きなのかしら？

あいつヤンキーぽいし……スケバンとか？

「お嬢様。こういうのはいかがでしょう」

そばにいたステラが差し出してきた。

純白のワンピース。レースが細かく編みこまれていてすごく綺麗。

「悪くないと思うけど……ほら、あたし、その……胸、おっきいし……」

着たら絶対アンバランスだと思う。生地が薄そうだからブラジャーも目立ちそうだし。

「はい、私も【まったく】似合わないと思います」

「じゃあすすめないでよ!？」

困惑するあたし。

相変わらずステラの考えは読めない……。

最終的に、キャミソールとショートパンツを選択した。

ニーソックスもつけてみる。かわいくてイイ感じじゃない？

……普段履かないから太ももの辺りがムズムズするけど、ガマン、ガマン。

ふと時計をみる。……なんかかなりヤバイ時刻になってるんですけど。

ギヤー！これじゃバス待つてるヒマなんてないじゃない！ただでさえ昼間バス少ないのにー！

「ステラおねがいつ！車出して！」

「ぶつちやけめんどくさいです」

「そこをなんとか！」

必死にお願いして、どーにか車に乗せてもらう。

……てゆーかうちの執事よね、アンタ。

待ち合わせ場所からやや離れた場所で降ろしてもらう。

広場に向かって走る。ミユールじゃなくてよかったあ……。

でも汗臭くなったらやだな……一応軽めの香水は持ってきてるけど。小鷹の姿を見つける。

「ごめん、遅くなっちゃった」

「気にすんなよ」

その言葉にほっとする。

だいぶ待たせちゃったかな……ステラにも迷惑かけたし……ゴメン

ナサイ。

小鷹はまじまじとあたしのニーソックスを見つめている。
ちよっぴり恥ずかしい…けど、こーいうの好きなんだ……覚えとこ。
そして顔を上げて、

「イイなあ、それ」

思わずどきつとする。

小鷹が、あたしの服を褒めてくれるなんて……。
ま、まあ当然よね！時間かけて選んだんだし！

「でしょー？ふふん、このキャミソールあたしもお気に入りなのよね！」

「えっ」

小鷹がキョトンとした顔をする。

「いや、ポニーテールのことなんだが……」

え？

なにそれ。

確かにいつも以上にポニテも気合入れてきたけど。
でもそれは前からずっとしてるじゃない……。
なんで服じゃなくて、そっちなよ……。

せっかく一生懸命頑張っただのにっ！なんなのよー！！

「あんたホントわかってないわね……」

がつくりと肩を落としてあたしは言った。

「わかってないってなにg」

「もーいいわよっ!」

少しでも期待しちゃったあたしがバカだった。ふんつ。

わざと高いやつ頼んでおごらせてやるのかしら?なんて意地悪なことを考えつつ、あたしと小鷹は目的であるスタバにたどり着いた。店に入る。

……なんだ、全然普通の喫茶店じゃない。

夜空のヤツがスペシャルでグレートなカフェっていうから期待してたのに。

高そうな絵画や骨董品が飾ってあるわけでもない。

派手な宝石をつけた頭の悪そうなマダムがお茶してるわけでもない。

店員の格好も安っぽいし……拍子抜けね。

二人で空いてる席に座る。

…。

……。

……店員が来ないんだけど。

「おっかしいわね……何やってんのかしら」

あたしがイライラしながらつぶやくと、小鷹はおずおずと、

「なあ、俺たち金髪ヤンキー……カップルとでも思われて避けられてるんじゃないか？」

ワケわかんないことを言ってきた。

「は、はあ？カ、カップルって！そんなことあるわけないでしょ！」

カップル……その単語に顔が火照ってくる。

ありえないし……目の前に居る目付きの悪いヤンキーと……でも、でもっ。

まあ……そう見られるのも……悪くは無いかもしれないけど……。

カップル……。

カポ……。

ってダメだったの！今日はリア充カフェの調査に来たんでしょうが！

「あーもうムカツクわね！店員呼んで来るっ！」

動揺をごまかす様に、あたしはガニ股で店員の方へ向かっていった。

「ちょっと！オーダー取りに来ないってどういうこと！？放置プレイがこの店の趣味なワケ？」

すると店員は困った顔をして、

「あ、いえ……てつきりお連れの方をお待ちなのかと」

え？意味がわからない。

「もしオーダーされたいのでしたら、こちらのカウンターで……」

あたしは急いで小鷹のそこへ戻る。

まさか、先に注文するなんて!!

喫茶店っていうから絶対オーダー取りに来るって思ってたのにっ！
しかも小鷹がビミョーに不安そうだったから、あたし『空いてる席に座りましょ』なんてドヤ顔で言っちゃったし!!

店員からも間違いなく『コイツばかりじゃねーの？（笑）』って思われてる……！

あ~~~~恥ずかしいよ~~~~!!

そして小鷹と一緒にカウンターへ移動。

げ、さっきの店員……とりあえず小鷹に先にオーダーしてもらおう、うん。

小鷹は何をたのむのかしら？

せっかくスペシャルな喫茶店に来てるんだし、やっぱりソレに相應しいスペシャルでグレートなものを注文しないと無意味よねっ！

「えーっと……コーヒーで」

思わずコケそうになった。

コーヒーってあんなね……自動販売機でも買えるじゃないの……。

そしてサイズのチョイスで黙り込んで悩む小鷹。

店員の目線が気になってしょうがない……。

ひとまずあたしたちはカウンターから離れて作戦会議をすることに。
その結果、サイズVが勝利のVであることを確信した。
小鷹が意気揚々とアイスコーヒーのVサイズを注文。

次はあたしの番。

正直恥ずかしさでいっぱい、目を合わせたくない……けど、それじゃダメ。

あたしは誇り高き貴族……いいえ、神いわゆるゴッドなのよ！
堂々と、優雅に振舞えばいいのよ！

そしてあたしはエクспレッソの名前を高々と宣言する。

エクспレッソ……このカッコイイ響き、まさに神であるあたしにふさわしいわね！

けれど、店員はまた困惑した表情を浮かべて、

「えっと、エクspレッソですね？ ソロとドッピオがごじますが……」

……へ。

……えすぷれっそ？

言い間違えてるし……っ！

エクspレッソじゃなくてエスプレッソ！？

クいらないの！？ クは余計なの！？

前髪ファサツてやって、エレガントに『決まったわ……』って思ってたのにー！！

うぎゃー！ どんだけあたしマヌケなのよお！
しかもそろ？ どっぴお？

……ドッピオ？

なななななによド・ド・ド・ドッピオって!?
いきなり専門用語使われてもわかんないってのー!
日本語使いなさいよ二・ホ・ン・ゴ!

もう一回小鷹と作戦会議。

話し合って、この店が難しいワードで客を惑わせ利益をむさぼる悪徳極まりない店だということがわかった。

このあたしをカモにしようなんて……ムカツク。

「エスプレッソ……ソ・ロ・で!」

店員をにらみつけるようにしてあたしは言う。

……よしっ、今度はきちんと言えてるわね。内心ホッとしたのはナ
イシヨ。

そして。

注文して出てきたものに絶句。

小鷹のほうはムチャクチャ大きいサイズのコーヒー。

あたしのエスプレッソはというと……ナニコレ?おこちゃまサイズ?

おこちゃまでもこんなちっこいの飲まないわよ。赤ちゃんサイズ?

……ふざけてんの?

「こんなの詐欺じゃない!金かえせー!」

周りの目も気にせずにキレるあたし。

小鷹になだめられて、どーにか席に座る。

うう……サイアク……………。

泣きそうな気持ちになりながら、あたしはエスプレッソのカップを見つめていた。

G r o o v i n ' M a g i c 【前編】（後書き）

好きな曲からタイトルをとってみました。星奈sideのタイトルはこういう路線にしようかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264x/>

僕は星奈が一番可愛いと思う

2011年12月7日22時50分発行